

# 尾州廻船内海船船主 重要文化財旧内田家住宅 旧内田佐平二家住宅



重要文化財旧内田家住宅 大門から主屋と作庭を見る



▲ 重要文化財旧内田家住宅 成玄縁・主屋



▲ 旧内田佐平二家住宅 主屋・東面透廊・隠居屋・土蔵

## 【旧内田佐平二家】の見どころ

江戸時代の知多半島は尾張藩に属し、「尾州廻船」と総称される大型の荷物運搬船による廻船業が盛んで、その中でも内海付近の船は「内海船」と呼ばれました。内田佐平二家は、内海を代表する廻船主内田佐七家の分家で、廻船業を営んでいました。屋敷は、正面から表門・東西納屋・主屋・隠居屋・土蔵から構成されています。明治5年5月に作成された家相図や家相を写った古文書がありますので、その頃に建設されたことがわかります。

### 【外観】

敷地は南北に細長く、南辺中央に表門を構え、その東西に東納屋と西納屋が接続しています。

表門を入ると、正面(北)に主屋が建っています。主屋は、可変透縁板の上に煙出しの小屋根がのり、正(南)面、西面、北面の三方に庇が付き、いずれも棧瓦葺きです。

主屋の南面西寄りに入出入口の大戸があり、その東側は障子およびガラス入り開閉子が建て込まれ、外側が濡れ縁になって、庇から直接階敷に上がることができます。主屋の北側東半も腰縁子が建て込まれ、外側に濡れ縁が付き、そして2階の窓にも障子が建て込まれています。

主屋の北側東寄りには、渡り廊下が北に延びて、その先には便所が接続します。さらにその北側には中庭を挟んで、隠居屋と土蔵が東西に並んでいます。



▲ 外観 原敷の東から主屋と東西納屋を見る



▲ 主屋北面前外観

### 【隠居屋】

隠居屋の東端には南床の付いた6畳の主座敷があります。南面中央に腰縁子が建て込まれ、中庭から直接出入りするようになっています。その差階には下地蔵もあり、数寄屋風の意匠になっています。



▲ 主屋北面前外観

### 【主屋にわ】

主屋は、西半の土間と東半の居室の大きくふたつの空間に分かれています。

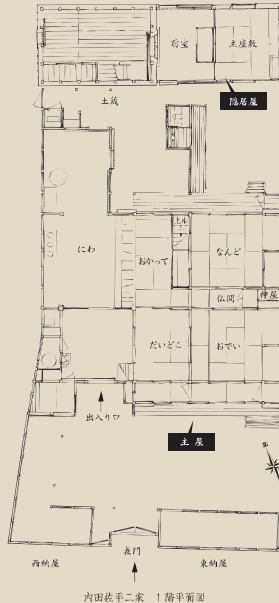
土間は、「にわ」とよび、南北両端に戸があり、通り抜けることができますが、途中で仕切って、「表にわ」と「奥にわ」の2室に分かれています。「表にわ」は「だいご」への上り口で、その上には板太天井を有って、二階が設けられています。「奥にわ」は内向き空間で、かまどや井戸を設けて、炊事や仕事場として使われます。上方には太い梁を組んだ小屋根が見え、かまどの煙を外に出すための煙出しが設けられています。



▲ 「表にわ」から「奥にわ」を見る



▲ 隠居屋主座敷から中庭を見る



内田佐平二家 1階平面図



▲ 「表にわ」から「だいご」越しに「おでい」を見る

### 【主屋二階主座敷】

「なんど」の西面北側にある箱階段から2階に上がります。

2階は、「なんど」の上が9畳の主座敷、「おかつて」の上が5畳の前室となっています。

主座敷には床の間に腰縁子が設けられ、天井は、南側に樟縁天井、北側が低い軒に合わせた化粧板葺きとなっています。そして、東面の床の間の北側から北面にかけて、窓が設けられています。1階の「おでい」に次ぐ格の高い階級となっています。



▲ 2階主座敷 床の間が向き、1階の「おでい」に次ぐ格の高い階級である

### 【主屋間取り】

主屋東半の居室は、南北2室、東西2列の「田」の字型平面を基本としながら、東列中央に幅半間の廊下状の部屋を設けています。まず、「表にわ」の東側に、6畳の「だいご」と9畳床付きの「おでい」が西面と並び、両者の間に幅半間の畳廊下、その南側に濡れ縁があります。「奥にわ」の東側、「だいご」の北には5畳半戸棚付の「おかつて」があり、「おでい」の北側には、1畳半仏壇付の仏間と半畳大の神屋が東西に並び、その北側には押入と戸棚付の9畳の「なんど」が並びます。「おかつて」と「なんど」の北側には廊下が延び、その中ほどから北に廊下が延びて、北端に便所が付き、



▲ 「なんど」の北には渡り廊下が延び便所が接続する

### 【主屋なんど】

家族の寝所等に用いられた内向きの部屋です。北側の中庭を挟んで、隠居屋が見えます。濡れ縁から北に延びる渡り廊下の先には便所が設けられています。西面北側の隅を開けると2階へ上がる箱階段があります。



▲ 「なんど」から中庭越しに隠居屋を見る

### 【主屋おでい】

「だいご」の奥に位置し、南側に縁縁と濡れ縁を挟んで前庭に面し、北側は仏間と神屋に接しています。床の間に腰縁子が設けられ、南側の上には長巾が掛り、天井は樟縁天井として、最も格の高い階級となっています。主人の居間や接客のために用いられました。



▲ 床の間に腰縁子の「おでい」から仏間と「なんど」を見る 仏間と並んで欄干の中に「神屋」がある

■ 所在地  
愛知県知多郡南知多町大字内海字西側 39

■ 交通案内  
【公共交通機関でお越しの場合】  
・名鉄知多新線(内海口)に乗り、終点「内海」で下車  
西海駅から徒歩7分(バス(606号)に乗り、「内海七家駅」で下車 徒歩2分)

【お車でお越しの場合】  
・南知多道路「南知多IC」で下車 西海方面へ約10分  
(カーナビをご利用の場合は、所在地の住所で検索してください)

■ 問い合わせ先  
〒470-3412 愛知県知多郡南知多町大字豊浜字須佐ケ丘5  
南知多町総合体育館(教育委員会 社会教育課)  
TEL 0569-45-2880 FAX 0569-65-2883  
E-mail: syakyou@town.minamichita.jp

発行：南知多町教育委員会  
写真・文：藤 新吾(名古屋工業大学大学院教授)  
平成29年3月発行

# 【重要文化財 旧内田家住宅】の見どころ

内田家の屋敷は、主屋・座敷・隠居屋・新納屋および複数の小屋と蔵から構成されています。これらの建物は、煉瓦や古岡などから、明治2年(1869)に竣工したことが確認できます。当時、内田家は廻船業を営んでいましたが、屋敷構えは庄屋格相当の規模と格式を備えており、廻船主の屋敷として、数少ない貴重な遺構です。

## 【主屋 にわ】 ①

主屋は前半の土間と後半の居間の大きくふたつの空間に分かれています。土間は「にわ」とよばれ、南北両端に大戸があり、通り抜けることができるとともに、かまどや井戸を設けて、炊事や仕事場として使われます。上方には太い梁を組んだ家伝な小屋組が見えており、伝統民家の特徴があらわれています。かまどの煙を外に出すための煙出しや、炬かり取りの窓が設けられています。座敷は、南北3室、東西2列の「六間取」を基本としながら、中央奥の部屋が仏間と神屋の2室に別れています。



▼ なんと 4代目内田佐七の書が張られた様



▲ 「にわ」 小屋組



▲ 「にわ」から「おかつて」・「なかのま」・「だいでこ」をみる

## 【主屋 なんと】 ②

家族の場所、2階に上がる階段は、多数の引出しが付いた箱階段になっています。内向きの部屋ですが、竪には、4代目内田佐七の書が張られています。

## 【主屋 仏間・神屋】 ③

道場神様は小さな神棚に祀られますが、仏間と同等の神屋を東西に並べ、神棚には左から金毘羅宮・多賀大社・伊勢神宮・熱田神宮・秋葉神社が祀られています。この神屋の存在と、金毘羅宮(航海安全)に対する信仰の厚さが、廻船主の住宅としての特徴となっています。

▶ 仏間



▶ 神屋

## 【主屋 だいでこ】 ④

廊下も美しい、土間からの「がり口」で、家族の居間でもあり、「おでい」の前室としての機能も持っています。神棚があり、足懸窓とよばれる太い鴨居と根太大付によって、重厚な室内意匠となっています。



▲ 「だいでこ」から「おでい」をみる



▲ 隠居屋 2階主座敷

## 【隠居屋】 ⑤

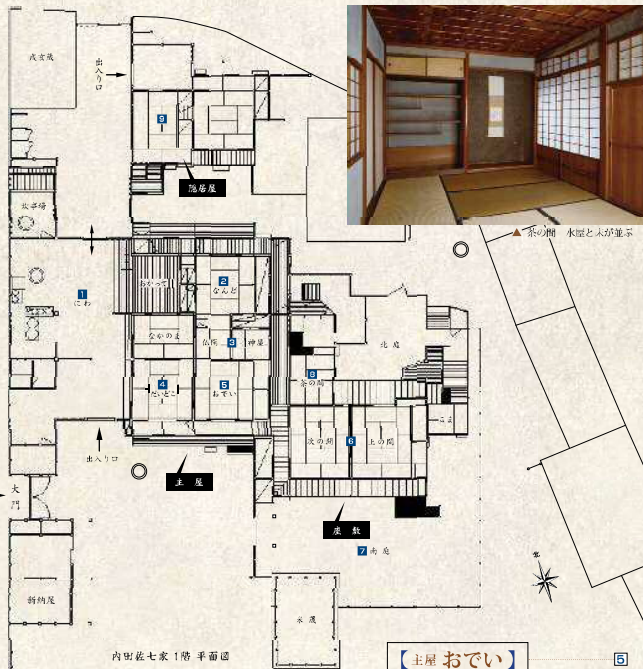
主屋とは別棟の老夫婦のための建物で、2階には床の間の座敷もあります。1階には明治7年(1874)に「東郷輝使取換所」も開設されました。

## 【茶の間】 ⑥

二畳二畳目の茶室です。台目は1畳の4分の3の大きさで、古くは半畳より大きいという意味で「大」という字があらわれています。茶室に一般的ななじり口はなく、庭に面して農入口が設けられています。床と水屋が並んでおり、茶室と、広間に対する水屋の両方の機能を備えています。下地窓や竹の格子窓、横竹の神鏡天井などに、数寄屋造の特徴があらわれています。



▲ 茶の間 水屋と太が扉扉



内田佐七家 1階 平面図

## 【主屋 おでい】 ⑤

「だいでこ」の奥、神屋と仏間の前にあり、主人の仲間や接客のために用いられました。床の間に設けられ、鴨居の上に長押が廻り、天井は精緻天井として、土壁では樹も格の高い座敷となっています。

## 【庭園】 ⑦

当屋敷には、主屋「おでい」の前庭と、座敷「上の間」・「次の間」・両側の主座および北側の「茶の間」に面する小庭があります。主庭は伝統先に取り出した露台を中心に構成され、花崗岩の上面をまっ平らに切り取った端正な手水と石燈籠とが主眼をなしています。切石や崩置石を交えた大振りの礎石の力強さも特徴といえるでしょう。これは大規模的に、北側の小庭は清冽な露が何びた雰囲気を感じ出しています。また、主屋「おでい」の縁先には坪やかな彫刻の立手水が埋められていて、往時を偲べます。(定例 解説 京都造形芸術大学 教授・日本庭園研究センター 所長)



▲ 座敷北側小庭



▲ 座敷北側露台 竹垂子壁と石燈籠



▲ 座敷「上の間」床・床縁(高巻木付)・南広縁・露台

## 【座敷 上の間・次の間】 ⑥

座敷は「上の間」・「次の間」が東西に並び、その南北に広縁があり、南東隅には露台、北西隅には「茶の間」・北東隅には「奥のこま」と並列が並びます。座敷はこの屋敷で最も格式の高い建物で、内海船の船主の組合「茂講」の審り合いや、冠婚葬祭など、特別な場合に使用されました。「上の間」には、床の間の床縁・付書院からなる座敷飾が設けられ、床縁には彩色を飾る「経巻床」があります。「上の間」の天井板は、木目の美しい屋久杉といわれており、また「上の間」・「次の間」境の欄間は、同様に木目の美しい板の引き違ひになっていることが注目されます。このような室内意匠には、尾張久田流の久田樂宗宗匠の指導を受けたといわれていますが、当家2代目佐七の意向も強くあらわれていると考えられます。



▲ 座敷「次の間」から「上の間」と「茶の間」をみる

▼ 座敷南側主座



▼ 座敷外観